

校長室から (N0. 14)

ある小説から

冬休みに小説「細川ガラシャ夫人」（三浦綾子作）を読みました。細川ガラシャは、戦国の武将「明智光秀」の娘であることは、ご存知かと思います。また、その明智光秀もまた、織田信長を討って、三日天下の悲しきヒーローとして、ドラマチックな最期を遂げていることでもよく知られています。

本小説の中での光秀は極めて思慮深く、清廉潔白な人物として描かれていました。特に印象的だったのは、光秀の娘ガラシャが幼少の頃、母親の痘痕を醜いと笑った時、幼な心に正直な物言いであったとしても、それを光秀は許さず、涙して娘を諫めている場面でした。

光秀の人物像をしのぶと同時に、善悪や人の道を教える親の姿として、光秀のすごみある怒りの表情を表現豊かに著してあることに、さすが小説だと思いました。



また、途中、「ガラシャ」というキリスト教の洗礼名を受けることに影響を与えた「高山右近」が登場します。右近は、キリシタン大名であり、その右近の生き方や信仰によって、ガラシャ夫人がキリスト教に導かれていきます。

領地を血なまぐさく奪い合う下克上の時代にあって、その右近が、領民の幸せを願い、「領民が不幸せでは、領主に幸せはございませぬ」と心底思って国を治めていることを他の領主と語り合っている場面がありました。そこでの右近の言葉もまた、私にとっては、心に響くものでした。

久しぶりに小説を読んだものですから、思わず感じたことをしたためてみました。